

(様式3号)

## 学位論文の要旨

氏名 小林 大河

### 〔題名〕

末梢肺野に存在する30mm以下の肺小細胞癌についてのHRCT所見の検討

### 〔要旨〕

肺小細胞癌(SCLC)は、全肺癌の15~20%を占める癌である。大部分の症例では初診時にすでに進行病期になっており、予後は極めて不良である。一方で、SCLCでは時に孤立性の小結節を認め、このうちリンパ節転移のない30mm以下のSCLCは、外科的切除と術後化学療法により治癒可能である。このような末梢肺野に存在するSCLCはその他の肺癌とは幾分異なった形態を示すことがある一方、良性病変と類似した形態をとることも多く、鑑別が難しい。末梢肺にみられるSCLCの特徴に関してはわずかな報告があるのみであり、本研究では、治癒的切除が期待できる可能性があるSCLCの特徴を明らかにするために、末梢肺に30mm未満の結節が存在する肺小細胞癌のHRCTにおける特徴を評価した。

2001年1月~2013年4月までの期間に当院で治療を行った肺腫瘍のうち、末梢肺野に結節の存在する30mm以下の小細胞肺癌は33例存在した。それらについてHRCT所見を評価し、外科的切除がなされた10例では、HRCT所見と病理所見との対比を行った。

その結果、辺縁明瞭、分葉状、気管支血管束肥厚、不均一な造影効果が高頻度に見られ、芋虫状/分枝状および多角形という特徴的な形態の結節も観察された。気管支透亮像や辺縁部のスリガラス影は低頻度であり、腺癌との鑑別点となり得る結果であった。また芋虫状/分枝状の形態や気管支血管束の肥厚は非Ⅰ期群でⅠ期群より高頻度で見られ、これは病理的にリンパ路にそった圧排性進展を反映し、小結節であっても進行しつつある形態を示唆する所見と思われた。また、腫瘍の不均一な造影効果は腫瘍の胞巣と胞巣の間に小さな壊死部分や結合織が介在することに対応していると思われ、これもさまざまな悪性結節や良性結節と鑑別するための重要な所見となり得るものである。さらに、悪性腫瘍では良性腫瘍よりも強い造影効果を伴うことが多く、結節が良性結節様であっても、造影効果の強弱から鑑別ができる可能性が示唆された。

## 学位論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第1381 号	氏 名	小林 大河
論文審査担当者	主査教授	渡野 公一	
	副査教授	池田 泉二	
	副査教授	松永 尚文	
学位論文題目名 (題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
末梢肺野に存在する 30mm 以下の肺小細胞癌についての HRCT 所見の検討			
学位論文の関連論文題目名 (題目名が英文の場合、行を変えて和訳を括弧書きで記載する。)			
HRCT findings of small cell lung cancer measuring 30 mm or less located in the peripheral lung (末梢肺野に存在する 30mm 以下の肺小細胞癌についての HRCT 所見の検討)			
掲載雑誌名 Japanese Journal of Radiology 第33巻 第2号 P.67~75 (2015年2月 掲載)			
(論文審査の要旨)			
<p>肺小細胞癌 (SCLC) は、全肺癌の 15~20%を占める癌である。大部分の症例では初診時にすでに進行病期になっており、予後は極めて不良である。一方で、SCLC では時に孤立性の小結節が認められ、このうちリンパ節転移のない 30mm 以下の SCLC は、外科的切除と術後化学療法により治癒可能である。このような末梢肺野に存在する SCLC はその他の肺癌とは幾分異なった形態を示すことがある一方、良性病変と類似した形態をとることも多く、鑑別が難しい。末梢肺野にみられる SCLC の特徴に関してはわずかな報告があるのみであり、本研究では、治癒的切除が期待できる可能性がある SCLC の特徴を明らかにするために、末梢肺に 30mm 以下の結節が存在する肺小細胞癌の HRCT における特徴を評価した。</p> <p>2001 年 1 月~2013 年 4 月までの期間に当院で治療を行った肺腫瘍のうち、末梢肺野に結節の存在する 30mm 以下の小細胞肺癌は 33 例存在した。それらについて HRCT 所見を評価し、外科的切除がなされた 10 例では、HRCT 所見と病理所見との対比を行った。</p> <p>その結果、辺縁明瞭、分葉状、気管支血管束肥厚、不均一な造影効果が高頻度に見られ、芋虫状・分枝状および多角形という特徴的な形態の結節も観察された。気管支透亮像や辺縁部のスリガラス影は低頻度であり、腺癌との鑑別点となり得る結果であった。また芋虫状・分枝状の形態や気管支血管束の肥厚は非 I 期群で I 期群より高頻度でみられ、これは病理学的にリンパ路に沿った圧排性進展を反映し、小結節であっても進行しつつある形態を示唆する所見と思われた。また、腫瘍の不均一な造影効果は腫瘍の胞巣と胞巣の間に小さな壊死部分や結合織が介在することに対応していると思われ、これも様々な悪性結節や良性結節と鑑別するための重要な所見となり得るものである。さらに、悪性腫瘍では良性腫瘍よりも強い造影効果を伴うことが多く、結節が良性結節様であっても、造影効果の強弱から鑑別ができる可能性が示唆された。</p> <p>本論文は、根治的切除の可能性を持ちながら、良性結節や他組織型の肺癌との鑑別が困難である末梢肺野の小型小細胞癌においてその HRCT 所見における鑑別点を明らかにした論文である。よって、学位論文として価値あるものであると認められた。</p>			
備考 審査の要旨は 800 字以内とすること。			